
タンホイザー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タンホイザー

【Nコード】

N0109J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

愛の女神の洞窟ヴェーヌスベルクで愛欲の日々を過ごした騎士タンホイザー。だが彼はかつて自分を愛してくれた乙女エリザベートのことを忘れられず彼女の下へ戻る。しかしそこでヴェーヌスベルクでのことを歌ってしまい。ワーグナーが作曲した不滅の名作です。幻想の世界をお楽しみ下さい。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

タンホイザー

第一幕 ヴェーヌスベ

ルク

モミの木々に覆われた山の奥深くにその洞窟があった。暗く深いその洞窟を入って行くとその一番奥深くにあるのは泉だった。青い泉には日光が差し込み鮮やかな緑の滝が見える。湖の中には裸体の乙女達がいる。それは水の妖精達だった。彼女達は不思議な形をしている。日や赤や黄色の艶やかな美しさを見せる植物を撫で回し微笑んでいる。日の光は紅く柔らかいが淫靡な光である。その赤と青、緑と黄色が混ざり合った世界の中で水の乙女達にバツカスの巫女達が裸かほば裸の淫らな姿で踊り森の精霊や山の精霊達と触れ合っている。互いの肌を感じ合い葡萄酒や果物に溺れている。退廃と快樂の世界がそこにある。

人間達もいる。若く美しい男女が入り乱れ精霊達と共に触れ合っている。そうしてその中でも人も精霊も乱れ合い触れ合い互いに淫らな宴の中に入る。霧も泉の中にありそれは淡い赤と紫の二つの色である。その世界の中であの美女エウロパもいた。

エウロパは白い牡牛に乗り何処かへ去りその彼女を海の乙女達と海の神々が迎える。彼等は海に似たその泉の中で快樂に溺れている。やはり何処までも退廃の快樂に満ちた世界であった。

「岸边に、岸边に」

水の妖精達が唄う。

「岸边で貴方と共に」

「快樂を楽しみましょう」

薔薇色のもやの中でまた快樂を貪るのだった。他の精霊達も人間達もその中に消えていく。そしてその中央にいるのは薄い紅の衣を着た妖艶な女だった。その紅の衣は薄く肢体が透けて見えている。

豊かな胸も脚もその殆どが見え黒い髪は身体を覆わんばかりに長く波打っている。黒い垂れ気味の瞳の左、その端にはほくろがある。唇は大きめでやはり紅い。その紅が顔と肌の白をさらに引き出させていた。妖しいまでに美しい美女であつた。

その彼女の枕元に一人の騎士がいた。黒い髪を後ろに撫で付け端正な彫の深い顔をしている。背は高く緑の丈の長い服に同じ色のズボンを身に着けている。剣も持っているが何よりも目につくのは。そのあまりにも大きな豎琴であつた。女は彼の名を呼んだ。

「タンホイザー」

まずはこう呼んだ。

「ハインリヒ。起きていますか」

「その声はヴェーヌスか」

タンホイザーと呼ばれた騎士はその声で目を開けるのだった。黒い目が見える。

「貴女が私を呼んだのですか」

「そうです。歌を」

ヴェーヌスは彼にせがんだ。彼女こそはヴェーヌス、この泉ヴェーヌスベルクの主であり愛欲の女神である。その彼女が今ここにいるのであつた。

「歌を聴かせて下さい。貴方の歌を」

「いや」

しかしタンホイザーは首を横に振る。何故かそれを断るのだった。

「もういい」

「もういい？」

「そう、もういい」

起き上がりつつ言うのだった。

「もういいのだ。愛欲の歌は」

「何を言うのですか」

ヴェーヌスは怪訝な顔で彼に言葉を返した。

「何を。このヴェーヌスベルクで愛欲を否定するとは」

「その愛欲こそがもういいのです」

だがタンホイザーはさらに言う。

「それこそが。もう」

「馬鹿な」

ヴェーヌも今のタンホイザーの言葉を受けて立ち上がる。そうして彼を問い詰めるのだった。

「貴方は忘れたのですか。どうしてここに来たのかを」

「ヴェーヌスベルクに」

「私は誰にも無理強いはいしない」

ここには彼女の確かな決意があった。

「誰であつても。そして」

「そして」

「ここに来る者は誰もが愛欲を求めて来ています」

言葉には絶対の自信があつた。

「誰一人として例外はなく。だからこそ」

「私もまたここに」

「何年になりました」

タンホイザーを見据えての言葉だった。

「貴方がここに来てもう何年か」

「それは」

「そう、答えられない程長いです」

これが答えであつた。

「それだけ長くいたというのに離れるのですか。あれ程愛欲を求めておられた貴方が」

「日や月もなく天上の優しい星達もない」

タンホイザーはここで嘆くようにして言うのであつた。

「新しい夏がもたらす新鮮な緑の茎もない。春を告げてくれるうぐいすの鳴き声もない」

「その様なものの何がいいのでしょうか」

「貴女が私の為に作り出した幸福な奇跡を讃えよう」

豎琴を奏でつつ唄う。

第一幕その二

「貴女の愛からほとぼしり出た甘美な喜悦が私の曇りなき完備の叫びと混ざり合う。私の喜びや歡樂を楽しむ心はそれにより満たされた」

「それこそがヴェーヌスの加護」

ヴェーヌスは告げた。

「だからこそ私は貴方を」

「貴女はかつて神々に与えたものを私に下された。しかし人である私にはその愛はあまりにも大きい。私は人間であるから」

「人だから何だというのです？」

「人は神ではない」

彼は唄う。

「私は変化を望む人間だ。歡樂だけを求めない」

「では何を求めるといいますか？」

「苦痛を」

何故かこの言葉が出されたのだった。

「苦痛も求めるのだ。喜びの中から」

「愚かな。苦痛を求めるなどと」

「だからこそ愛の女神よ」

歌は他ならぬヴェーヌスに向けられたものであった。

「行かせて欲しいのだ、もう」

「何という歌」

歌を聴き終えたヴェーヌスは不快感を露わにさせていた。

「その様な歌を私に聴かせるなんて」

「しかし」

「くぐもった不愉快な歌」

彼女にはこう聴こえるのだった。

「貴方の歡喜は何処に行ったのか。私の愛が緩んでしまったのか」

「それはない」

「なら何故」

タンホイザーに対して問う。

「貴方はこつも嘆くのですか」

「貴女の愛には心より感謝している」

タンホイザーはまた豎琴を手にして唄う。

「貴女の愛は讃えられるもの、その傍らに留まることこそ永遠の降
伏」

「ならば何故」

「しかし私は人間に過ぎない」

言う言葉はまたこれであつた。

「神が身の情熱と奇跡、薔薇色の香りより」

「それよりも」

「空の澄んだ青に牧場の新鮮な緑、小鳥の愛らしい歌を愛したいのだ。あの鐘の懐かしい親しい響きを。私は今愛してやまないのだ」

「不実なこと」

ヴェーヌスは今度は言い捨てた。タンホイザーを見据えて。

「私の愛を嘲り拒もうとするのか」

「それは違う」

タンホイザーはそれは否定する。

「だが。私はそれでも」

「違うというのですか？」

「違う」

タンホイザーはそれは確かに言う。

「決して。その様なことは」

「私の愛に飽きたとでも」

ヴェーヌスが次に思ったのはこのことだつた。

「愛の女神である私の」

「愛の女神の愛は飽きることがない」

タンホイザーはそれもまた否定する。

「それもまた断じて」

「ならば一体」

「何度も言う。私は人間だ」

これはどうしても変えられないものだった。どうしても。

「だからこそもう」

「裏切り者」

ヴェーヌスの言葉が剣になっていた。

「そうして私の下から去るのですね」

「貴女の愛は大きい。しかし人である私には」

「行つてはなりません」

剣がさらに鋭いものになった。

「何があるうとも」

「だが私は」

「さあ、御覧なさい」

ヴェーヌスはここで泉の奥を指差した。淡い赤に覆われた青い世界を。そこには限らない愛欲と歓楽の世界が広がっていた。

「あの世界を」

「愛欲の世界」

「そうです」

ヴェーヌスの言葉から剣ではなく愛が出て来ていた。

第一幕その三

「薔薇色の優しい霧に覆われた歓喜の世界です」

「かつて私が欲してやまなかった」

「そして今でもです」

ヴェーヌスの誘惑であつた。

「今でも。貴方は」

「私は」

「タンホイザー」

また彼の名を呼んだ。

「来るのです」

「何処に」

「決まっています」

彼の心の直接語り掛けた言葉だつた。

「この世界に。私の腕の中に」

「しかしもう私は」

「岸边へ」

またここで水の乙女達の声が遠くから聴こえてきた。

「岸边に近付きましょう」

「さあ、御聞きなさい」

彼女達の声を背景にまたタンホイザーに告げる。

「あの声を。そして思い出すのです」

「貴女の快樂をと仰るのか」

「その通り」

甘いが蔽かな響きの声であつた。

「我が唇よりまた我が目より味わつたあの神の酒の味を」

「ネクターの味を」

「思い出すのです。それこそが神の喜びであり愛の宴の歓喜」

タンホイザーへの言葉が続く。

「さあ愛しい人よ、私の下へ」

「だが私はそれでも」

タンホイザーの言葉は強かった。

「私は自由が欲しい。奴隷であるというのに」

「戯言を」

奴隷という言葉にヴェーヌスのその美麗な眉が歪んだ。

「人の世界、いやあの神の世界こそ奴隷の世界」

「だが」

「わかつている筈です」

今度の言葉は宣告に近かった。

「人の世のことは。貴方こそが」

「いや、私が」

「どうしてもというのですね」

「私はもう留まることはできない」

ヴェーヌスから目を逸らした。

「もう。私は」

「ならば行きなさい」

そのタンホイザーから目を離すことなく告げた言葉であった。

「私はもう引き止めない。この快樂の世界へ」

そしてさらに言う。

「あの神が支配する陰気なる妄想の世界からこの神々の麗しい泉に
来たというのに再びまたあの世界に戻りたいというのなら。しかし」

「しかし」

「人は冷たいもの、いや」

タンホイザーに対して言葉を代えてきた。

「あの神は冷たいもの。救済を求めようともし救済を得られぬ世界へ」

「そんなことは」

「あるのです」

神らしい有無を言わせぬ宣告であった。

「貴方が離れた者達の慈悲を願いそして拒まれるのです。その時に

わかるでしょう」

「何が」

「貴方の居場所が」

またしても厳かにタンホイザーに告げてみせた。

「果たして何処なのかよ」

「それがここだと仰るのですか」

「ここはいずれ全ての人間達が戻って来る場所」

今の彼女の言葉には絶対の自負さえあった。

「追い出され呪われた貴方もまたあの神の下からここに戻って来る。

私は、いや神々は」

「神々は」

「誰も拒みはしない」

神の言葉であった。

「誰であるうが。決して」

「そう、必ずだ」

タンホイザーもまたその言葉に反応してヴェーヌスに言葉を返した。

第一幕その四

「私ももう二度と戻るつもりはない。決して」

「何とでも言うのです」

最早ヴェーヌスは全く動じてはいなかった。

「そう、何とでも」

「何故そこまで自信に満ちておられるのか」

「言った筈です」

タンホイザーにこう問われても女神の自信は揺らいでいなかった。

「ここには全ての人間達が帰って来るのです」

「全ての」

「そしてこれも言いました」

厳かな言葉がまた戻っていた。

「貴方は必ず私のところに戻って来る。不実な貴方は」

「もう私は」

「これもまた言いました」

逃れようとしたタンホイザーにさらに告げる。

「あの神は救いなぞ与えはしないと」

「それはない。きっと」

「救いを与えるのは女神のみ」

その女神の言葉である。

「それ以外にはありません」

「女神が救いを」

「そうです」

再び厳かな声をタンホイザーにかけた。

「あの世界に女神はいないのですから」

「それは違う」

タンホイザーはヴェーヌスの今の言葉をはっきりと否定した。
「救いを与えてくれる者、それは」

「女神以外にはない」

「だからそれは違うのだ」

またしてもヴェーヌスの言葉を否定した。そして遂に言うのであった。

「聖女」

彼は言った。空を見上げ。

「聖女こそが私を救ってくれるのだ。全てを」

「ならばその聖女を探すがいい」

ヴェーヌスはここで遂に己の姿を消していった。

「決して見つからぬそれを」

こう言い残して完全に消え去ってしまったのだった。彼女が消えると同時に泉もまた消えていった。タンホイザーは一人モミの森の中に残されたのであった。

モミの森から離れた何処かから牧童の声が聞こえてくる。

「ホルダの女神が降り谷や野原を歩き回る」

古い牧童達の歌だった。

「私の耳は甘い響きを聞き目は見たいものが多い。幾つかの夢を見て目を開くと五月がそこにいた」

幻想的な歌であった。まるでここにはいないかのように。

「五月が来たのだ。シャルマイを吹いて祝福しよう、この美しい五月を」

「我が主よ」

牧童の歌と混ざり合ってまた別の歌が聴こえてきた。

「我々は貴方に憧れる。巡礼の望みよ」

「美しく清らかな聖母よ讃えられてあれ」

巡礼の歌であった。ローマまでの。彼等は巡礼の歓びを味わっているのである。

「罪の重荷が我々を押さえ耐えられぬ」

「だが休息を選ばず喜んで辛苦を選ぶ」

「慈悲の-high祭典のこの日に私は罪を謙虚にあがなう」

贖罪もまた謡われる。明らかにこちら側の歌であった。

「信仰に忠実なる者には恵みを。懺悔と悔恨により救われん」

「幸あれ」

牧童の声が彼等を祝福する。

「ローマへ行く人達よ幸あれ、私の哀れな魂のこともどうか」

「戻って来たのだ」

タンホイザーはこの二つの歌を聴いていた。どちらの歌も一段落ついたところで呟いたのであった。

「私は。この世界に戻って来たのだ」

「我が主よ」

「そう、主だ」

巡礼の言葉に今この世界のことを実感した。

「主によつて私は救われるのだ。聖女によつて」

跪き静かに祈りはじめた。巡礼も牧童もその声を森の中に消していった。やがれ森の中に狩人の服を着た立派な男達がやって来た。彼等はすぐに祈っているタンホイザーに気付いた。

「むっ!？」

最初に気付いたのは先頭の初老の男だ。濃い立派な口髭を生やし非常に大柄で立派な体格をしている。左手に持っている弓が小さい程だ。

「あれ一体」

「伯爵、一体」

「どうされました？」

「あれだ」

この男チューリングゲン辺境伯であるヘルマンはここでその男を指差したのであった。

第一幕その五

「あの男だが」

「懺悔していますな」

金髪に青い目の若い男が彼に答えた。この辺り、いや帝国の中で最も有名なミンネジンガーであるヴァルターⅡデアⅡフォンⅡフォーゲルヴァイデである。

「どうやら」

「うむ、そうだな」

ヘルマンはヴァルターのその言葉に頷いた。

「どうやらな」

「外見を見ますと」

白髪の男もいた。この男もミンネジンガーでありビテロルフⅡフォンⅡグローセヒルドという。

「騎士のようですが」

「では我々と同じか」

赤い髪に黒い目の若い騎士が述べた。ラインマルⅡフォンⅡツヴェーターである。やはり彼もミンネジンガーである。ヘルマン以外にここにいるのは全てそうであった。

「騎士か」

「それにしても」

また一人のミンネジンガー、黒い髪にブラウンの目の最も若い男が口を開いた。ハインリヒⅡデアⅡシュライバーという男だ。

「何処かで見たような」

「そうだな、確かに」

ヘルマンもハインリヒの言葉に頷く。ここで茶色の髪に緑の目の最後の一人が口を開いた。この中では最も優れたミンネジンガーと言われているヴォルフラムⅡフォンⅡエッシェンバッハである。

「お待ち下さい、領主よ」

「どうした？」

「あの男はまさか」

その騎士を凝視して語る。

「ハインリヒではないでしょうか」

「何、ハインリヒといえば」

「まさか」

今のヴォルフラムの言葉にヴァルターとビテロルフが反応する。

「タンホイザーか」

「あの男が」

そしてラインマルとハインリヒも。誰もが今のヴォルフラムの言葉に驚きを隠せない。

「間違いない、彼だ」

「まさか今頃」

「戻ってきたというのか」

「領主よ」

ラインマルがヘルマンの側に來て囁く。

「確かに遠目には似ています。いや、何よりも」

「うむ」

ここで彼等はその騎士の服も見た。緑の服とズボン、それに同じ色のマントと大きな豎琴。どれも彼等がよく覚えているものである。

「あの服装はやはり」

「ハインリヒ、いやタンホイザーのものだな」

「間違いありません」

「ビテロルフもまた言う。」

「タンホイザーです、あれは」

「戻って來たのか、遂に」

ハインリヒは感慨を込めて呟く。

「このチューリングエンに」

「呼ぼう」

ヴァルターが提案した。

「彼を。ここに」

「そうだな。よし」

ヘルマンは彼の言葉に頷いた。そうして判断を下したのであった。

「呼ぶぞ」

「はい」

「タンホイザー！」

それぞれの口でこう呼んだ。

「タンホイザー、君なのか！」

「その声は」

果たしてその緑の騎士はその呼び声に立ち上がった。そのうえで周囲を見回し彼等の姿に気付いたのであった。

「貴方達が。どうしてここに」

「それは我々の言葉だ」

皆タンホイザーのところへ近付いてきていた。ヘルマンが彼等を代表して彼に告げた。

「何故卿がここにいるのだ」

「そうだ、我等を捨てたのではなかったのか？」

「それがどうしてだ」

騎士達も口々に彼に問う。

「それがまたどうして」

「ここにいるのだ」

「講和か」

ビテロルフがタンホイザーに直接問う。

第一幕その六

「それとも戦いか」

「友として来たのか。それとも」

「ヴァルターもビテロルフと同じことを彼に問う。」

「敵か」

「タンホイザー、我々はここにいる」

「ラインマルの問いは敵か味方ではなかった。」

「そして君もここにいる」

「どちらなのだ、君は」

「ハインリヒは彼に返答を求める。」

「味方か。それとも敵か」

「いや、待て」

「しかしここでヴォルフラムが仲間達に告げた。」

「彼の素振り、これが高慢の素振りか」

「敵の？」

「そうだ、敵ではない」

「一同に告げてからまたタンホイザーに顔を向けて言う。彼はタンホイザーに問うてはいなかった。」

「大胆な歌手よ、よく戻って来た。我々の中に君の席だけが空いたままだった」

「そうだ、平和の心があるならば」

「タンホイザー、我々は君を歓迎しよう」

「友人として」

「だから。ここに帰って来るのだ」

「タンホイザーよ」

「騎士達に続いてヘルマンも彼に声をかける。」

「私も卿を歓迎する。だが」

「だが？」

「卿は何処にいたのだ」

彼が問うのはそのことだった。

「何処にいたのだ、一体」

「遠い世界を」

何故かこう答えるのだった。

「遠い世界で。私はそこに安らぎを見出せなかった」

「休息を得られなかった？」

「それは一体」

「それは聞かないでくれ。だが私は君達と戦う為に来たのではない」

「では我々のところに帰って来るのだな」

「違うのか」

「いや、違う」

首を横に振って彼等に答える。

「私は行かなければならない。ここにはいられないのだ」

「いや、それは駄目だ」

ヘルマンは強い声で彼を呼び止めた。

「ここに留まるのだ。戻るのだ」

「そうだ、ここに留まるのだ」

「我々の仲間として」

「だが私は」

「いや、駄目だ」

タンホイザーは彼等を振り切ろうとするがそれはヘルマンと騎士達によって止められる。しかしタンホイザーの決意は固かった。

「私は。ここにいてはならないのだ」

「何故だ、何故それ程まで拒む」

「ならばどうしてここに帰って来たのだ」

「私はただ前に行くだけ」

ローマの方を見て呟く。

「ただそれだけだ。振り返ることは許されない」

「友よ」

その彼にヴォルフラムが一際強い声で彼を呼んだ。

「待っているのは我々だけではない」

「では誰が」

「エリザベート姫が」

彼は言った。

「姫が待つておられるのだ」

「エリザベートが」

「そう、姫がだ」

またエリザベートという名を出すタンホイザーだった。

「姫が待つておられる。君のことを」

「エリザベート」

彼はその名をまた呟いた。

「姫が待つているのか」

「そうだ、姫もまた君のことを待つておられるのだ」

そしてまた言うのであった。

「君は大胆な歌い方で我々に挑戦しある時は君が勝ちある時は我々が勝った」

「どれも素晴らしい勝負だった」

「よき思い出だ」

「しかし栄冠は君だけが得た。いつも君だけだった」

騎士達も言いヴォルフラムもさらに言葉を続ける。

「君の魔力と純粋さが混ざり合った歓喜と苦痛に満ちた歌は貞節な乙女の心すら虜にしてしまい君が去った後秘めの心は最早歌を聴こうとはしなかった」

「歌をか」

「そうだ。蒼ざめた姫の御心は君の歌だけを欲していたのだ。だから友よ」

タンホイザーを見て語る。

「姫の為に戻るのだ。彼女の星がまた新たに我々を照らすように」

「そうだ、タンホイザーよ」

「戻るのだ」

騎士達もヴォルフラムと共に彼を呼ぶ。

「戻れ、ここに」

「帰って来るのだ」

「友人として」

「あの殿堂に」

「争いも不和も終わったのだ」

ヘルマンが厳かに彼に告げる。

「だからこそ。戻るのだ」

「私は。あの殿堂にいていいのか」

「そうだ、戻るのだ」

ヘルマンもまた強い声で彼を呼んだ。

「この世界へ」

「エリザベート」

彼はまたエリザベートという名を呟いた。

「私が去った世界。この美しい世界にまた私は」

「帰って来た、緑の騎士が」

「素晴らしい騎士が」

「天は私を見下ろし草原は豊かに飾られている。春の限らない優し

い響きは歓喜をあげて私の中に入っていく」

エリザベートを想いつつ歌う。

「甘美に、そして激しく私のこの心は彼女の下へ」

「彼の不遜を砕いた優しき心を讃えよう」

ヘルマンと騎士達も歌う。

「さあ我等の歌を人々の耳に響かせよ。陽気に生氣ある響きとなっ

て全ての者の胸から歌われるのだ」

ヘルマンが角笛を吹くと森全体からそれに応える角笛の声が返っ

て来た。タンホイザーは今森と殿堂に帰って来たのだった。かつて

彼が去ったその世界に。

第二幕その一

第二幕 歌合戦

白い美しい城の広い一室。質素だが清らかな美しさに満ちている。柱も窓も装飾こそないがその中は実に清らかだった。その部屋に今一人の乙女がいた。

白い服に身を包んでいる。金色の髪は長くその身体を全て包んでいる白い衣をさらに覆ってしまうようであった。波がかったそれからは眩いばかりの光が放たれている。

青い瞳は湖のそれだった。二重で垂れている。眉はそれに合わせた形であり細い。白い肌に紅の唇、そして左目の端にはほくろがある。麗しくかつ美しい乙女であった。

その乙女が今静かに喜びを感じていた。一人そこにたたずみ。一人歓喜の中に身を置いていた。

「貴き殿堂よ、私は喜んで貴方に挨拶を送りましょう。愛する殿堂よ」

殿堂に対して感謝の声を出すのだった。

「貴方の中にあの方の歌があり私を沈鬱な夢から目覚めさせてくれた。彼が去ってから平和は私から去り喜びは奪われた。けれど今私の胸は高鳴り貴方も私には気高く見える」

殿堂に感謝の言葉を贈っていた。

「あの方は私も貴方も新たに生命付ける。あの方はもうすぐここに戻って来る。今我が胸の高鳴るように私の挨拶を。貴き殿堂よ、今私の挨拶を受けなさい」

「姫やはりこちらでしたか」

「お久し振りです」

「貴方達は」

エリザベートが言葉を終えたその時にヴォルフラム達が殿堂に入ってきた。エリザベートは彼等に顔を向けて応えたのだった。

「彼を呼んできました」

「こちらに」

「彼といいますと」

「そうです。タンホイザー」

今ヴォルフラムがタンホイザーの名を呼んだ。

「さあ、ここに来るのだ」

「今こそ」

「タンホイザーがここに」

エリザベートは騎士達の言葉を聞いてその胸の高鳴りがさらに響いているのを感じていた。

「ここに帰って来る」

「さあ今」

「ここに」

「姫よ」

そして今彼が帰って来た。静かに部屋に入り。そうして今エリザベートの前に片膝をつくのだった。

「ここに」

「タンホイザー」

エリザベートは己の前に片膝をつく騎士にまずは声をかけた。

「戻って来られたんですね」

「申し訳ありません」

「謝る必要はありません」

まずはこうタンホイザーに告げる。

「そして立つのです」

「宜しいのですか」

「立って下さい」

こつとも言つのだった。

「貴方はここでは跪いてはならないのです」

「何故ですか」

「ここは貴方の場所」

だからだというのだった。

「だから。跪いてはならないのです」

「ですが私は」

「立って下さい」

彼女の言葉はあくまでタンホイザーを引き寄せるものだった。彼女も前でも拒みを見せる彼をあくまで引き寄せるのだった。

「どうか。ここは」

「ここは」

「立って下さい」

「……はい」

エリザベートの言葉を受けて遂に立ち上がった。エリザベートはその彼に熱い目を向けつつ静かに彼に対して問うのであった。

「よくぞ戻って来られました」

「はい」

「今まで何処に」

そして今問うた。

「何処におられたのですか。貴方は」

「遠い国へ」

エリザベートを見て答える。その声は決して虚ろなものではなかった。

「遠い国にいました」

「遠い国にですか」

「ですが昨日と今日の間には深い忘却の霧があります」

謎の言葉であった。誰にとっても。

「全ての重いでは遠い彼方となり今一つのことを思い出さずにはいられません」

「それは」

「私が貴女に会いたいという希望を捨てていたこと」

エリザベートを見て語る。

第二幕その二

「その私が貴女の御姿をここで見ようとは」

「ではどうしてここに」

エリザベートはまた彼に問うた。

「ここに戻って来られたのですか」

「奇蹟です」

半ば恍惚したうえでの言葉であつた。

「これはまさに」

「奇蹟ですか」

「そうです。それにより私はここに」

「では私は」

エリザベートの恍惚はタンホイザーより深いものであつた。その恍惚の中で語る。

「私はこの奇蹟を心の底より讃えます」

「讃えられるのですね」

「そうです。まるで夢の中にいるよう」

それは恍惚となつてゐるその顔にも出ていた。

「無力に奇蹟の力に身を委ねて自分でもわかりません」

「では貴女は」

「今は貴方の、貴方達の」

まずタンホイザーを、次にヴォルフラム達を見て述べる。

「貴方達の歌や賛美こそ優美な芸術。ですが貴方のそれは」

「私のそれは」

「私の胸に不思議な生命を呼び起こすのです」

これはタンホイザーにのみかけられた言葉であつた。

「知らざれし情感と欲求。痛みの如く身体を震わし激しい歡樂に
おののく。その貴方が消えてしまった時から私の時は止まってしま
つていました。何を聴こうとも心が動くことなく」

本心の言葉であつた。

「夢の中では鈍い苦痛を感じ目覚めれば激しい妄想。喜びは消えていました」

「姫」

そのエリザベートに申し訳なさそうに、だが毅然として語る。

「貴女は愛の神を讃えられるべきです」

「愛の神を」

「そう、愛の神を」

何故かヴェーヌスと言いはしない。

「彼女が私をこちらに連れて来たのですが」

「愛の神がなのですね」

「そうです。愛の神が」

「では讃えましょう」

エリザベートもまたタンホイザーのその言葉を受けるのであつた。

「かくも優しき知らせを貴方のもとからもたらした愛の神を」

「そうです、讃えましょう」

「そして今この時もその神の力も」

エリザベートの感謝はそちらにも向けらるのだった。

「貴方の口より伝えられたその力も」

「讃えましょう」

二人は恍惚とした顔で言い合うのだった。ヴォルフラム達はそれを見て微笑むだけだった。微かに寂しさが宿ったその微笑みで。

「これでいいのだな」

「うむ」

「それでは我々はこれで」

「去るとするか」

「そうしよう」

五人は静かに去つた。やがてタンホイザーも歌合戦の話を従者から聞きエリザベートの前から退いた。一人になったエリザベートのところに今度はヘルマンがやって来た。

「叔父様」

「我が姪よ。ここにいるとは珍しいな」

エリザベートの顔を見て彼女に言うのだった。

「何かが変わったのだな。やはり」

「はい」

叔父の言葉にこくりと頷くのであった。

「その通りです」

「ここに入ることを長い間拒んでいたというのに」

窓の向こうから声が聴こえてきた。小鳥達の歌声だった。

「我々が今行おうとしている歌の祭典に誘われたのか」

「それは」

「そなたの心を私に打ち明けることができるようになったか」

「それはまだです」

俯いて叔父に答えるエリザベートであった。

「申し訳ないですが」

「ならよい」

ヘルマンは姪のそのことを許した。

第二幕その三

「そなたの秘密はそなた自身が解決できるようになるまで魔力の力で破れぬようにしておくのだ」

「有り難うございます」

「歌は素晴らしいものを目覚めさせ活気づける。今日もまた同じだ」
「同じなのですね」

「優しき芸術よ、今こそ実現せよ」
「今こう宣言するのだった。」

「もうすぐここにこのチューリングンの貴族や騎士達が集う」

「あの方々が」

「そうだ、皆集うのだ」

「歌手達もですね」

「彼等こそが主役」

ヘルマンが治めるこのチューリングンはかなり栄えていた。彼はこの地を治める者としてあらゆる者の敬愛を一身に集めていたのである。無論貴族や騎士達のそれでもある。

「そなたの前にもな」

「そしてあの方もまた」

「そうだ。彼もだ」

それが誰なのかはもうヘルマンもわかっていた。

「来る。ではな」

「はい」

ここでファンファールが鳴った。それと共に殿堂に次々と着飾った貴族や貴婦人、騎士達がやって来る。彼等はそれぞれヘルマンとエリザベートの一礼しそれぞれの席に着いていく。席が全て埋まるとそのうえで彼等はヘルマンを讃える言葉を告げるのであった。

「喜びて我等は貴き殿堂に挨拶を送る。ここに芸術と平和は永遠に留まりてあれ！」

まずはこの殿堂と芸術、そして平和が讃えられる。

「喜ばしき叫びよ長く響け。チューリングン領主たるヘルマン万歳！」

「では今より歌手達の入場です」

小姓達がここで厳かに告げる。ヘルマンとエリザベートは城の主の席に並んで着く。エリザベートは妻を亡くしたヘルマンの隣に座して女主人の役割を担っている。

まずはヴォルフラムが入り続いてビテロルフ、そしてヴァルター。ラインマルにハインリヒも入る。皆着飾り見事なマントを羽織り大きな豎琴を持っている。

そして緑の騎士もまた。タンホイザーは緑の服とマント、それにはやはり豎琴を持ってやって来た。彼の姿を見て貴族や騎士達の中には声をあげる者もいた。

「タンホイザーだ」

「噂には聞いていたがやはり」

「戻って来たのか」

帰還を喜ぶ者もいれば驚く者もいる。

「何処に行っていたのか」

「死んだとも言われていたが生きていたのだな」

「そうだな。そしてそれだけではないな」

「うむ」

タンホイザーを見つつ語るのであった。

「何かを見てきたようだな」

「遠い目をしている」

このことに気付く者もいたのだ。

「一体何処に行っていたのか」

「そして何を見たのか」

「それが歌われるのだろうか。それとも」

「何かが起こるのだろうか」

人々はタンホイザーを見続けていた。だがやがてその話も自然と

消えてヘルマンが立ち上がり。厳かに場に対して告げるのであった。
「かつてよりこの殿堂では多くの美しい歌が素晴らしい歌手達によつて歌われてきた。卿等は賢明なる謎の歌や陽気な歌で我々の心を救ってくれた。我々の剣は多くの鮮血を経てドイツを救ってきた」

これこそ辺境伯の誇りであつたのだ。元々はプロイセンにしろオーストリアにしろそうである。ゲルマンの防波堤でもあつたのだ。
「残忍なヴェルフ達に対抗し分裂を防いだ」

教皇に属する者達と皇帝を指示する者達の戦いは神聖ローマ国内のことだ。ドイツは内外に多くの悩みを抱えていたのである。

「卿等の功績はこういった剣での功績に比肩する。いと高き、美しき勝利だ」

こう言つてミンネジンガー達を褒め称える。

「そして今日は彼が帰つて来ている」

「タンホイザーが」

「如何にも」

客人達にも胸を張つて答える。

「不思議なる奇蹟により。そして今私は今回の歌合戦の主題を提示しよう」

「それは一体」

「愛の本性だ」

彼が提示したのはこれであつた。

第二幕その四

「これを明らかにしてもらいたいのだ」

「歌手達にですな」

「如何にも。そして」

彼はさらに告げる。

「この答えを最も価値高く為し得る者には褒美が与えられる」

「褒美が」

「それは我が姪より与えられるもの」

傍らにいるエリザベートを見ての言葉であつた。エリザベートもそれを受けて静かに、だが確かな動きでこくりと頷いてみせた。

「その価は思いのまま。私がそれを許す」

「何と」

「何という素晴らしい褒美なのか」

何でもよいというからだ。だがこれは今のヘルマンの喜びをそのまま告げたものであるのだ。タンホイザーの帰還を喜ぶ彼の心を。

「それではだ」

「はい」

ヘルマンの言葉に小姓達が応える。すぐに金の杯を持って来て歌手達の前を回る。歌手達は次々に紙に何かを書きその紙を折つたうえで杯の中に入れる。小姓達は続いてそれをエリザベートの前に持つて来る。エリザベートはその中の一枚を取つてそれを小姓の一人に優しく手渡す。そこにあつたのは。

「ヴォルフラム卿」

「ヴォルフラム」フォン「エッシェンバッツ八殿です」

「おお、ヴォルフラム殿が最初か」

「これは面白い」

小姓達が告げた名は貴人達が声をあげるに充分なものであつた。
「さて、どうなるか」

「最初からこれは聴きがいがあるというもので」

「ではじめて下さい」

「ヴォルフラム卿」

「如何にも」

ヴォルフラムは小姓達の言葉を受けて静かに、だが毅然とした端整な動作で立ち上がった。そして今生真面目な様子で歌うのであった。

「この貴き戸惑いを見渡し崇高なる光景に我が心は熱せられる。勇と誠、そして賢ある方々が集い壮麗にして鮮やかに緑のかしわの森の如く」

「かしわか」

タンホイザーがそれに微かに反応する。

「モミではないか」

「愛らしき花の香高き花輪にまどろ。我が目はこの光景に酔い痴れ、歌はその優雅の前に止まってしまふ。だは眩き天上の群星の一つを見上げ遠き彼方より魂は敬虔に沈む。そして見よ」

言葉が変わった。

「私の心に奇蹟の泉が現われ私は驚いてこれを見る。その泉から心は恵み豊かなる喜びを汲み情けは得も言われず蘇る。私はこの泉を穢すことはない」

さらに歌っていく。

「恥を知らぬ勇により手を触れることはない、崇める心で身を捧げ最後の血も喜びて流そう。さあ、この言葉のお知り下さい。愛のその清き本性を私がどう解しているのかを」

「素晴らしい」

貴人達の多くがヴォルフラムを賞賛する。

「何と素晴らしい歌だ」

「全くだ」

そして他の貴人達もそれに続く。

「流石と言つべきか」

「やはりヴォルフラム卿だけはある」

「見事だ」

「そして美しい」

「端整ですらありますな」

「如何にも」

口々にヴォルフラムの歌を賞賛するのであった。他の騎士達も納得した顔で頷いている。だがタンホイザーだけは何故か今の歌にシニカルな笑みを浮かべていた。

そして。今立ち上がり彼に対して言うのであった。

「ヴォルフラムよ」

「タンホイザーか」

「まだ彼の番ではない筈だが」

人々は彼が立ち上がったのを見てひそひそと言い合う。しかしその間にもタンホイザーはヴォルフラムに不敵な笑みを浮かべて言うのであった。

「君は愛の姿を不当に歪めた」

「私の歌が違うというのか」

「そうだ」

自信に満ちた声で告げるのだった。

第二幕その五

「君がその様に思いわずらうのなら本当の世は閉ざされてしまうだろう」

「一体何を言っているのだ？」

「いと高き遠方に神を讃え天とその星を仰ぐ。かかる奇蹟を崇めるのもよからう」

タンホイザーは一旦はヴォルフラムの歌を認めはする。

「しかしだ」

「しかし？」

「接触によつて軟化するもの、君達の情と感覚に近くあるもの。同じ素材から作り上げられ柔らかい形で君にすりつくものだ」

「それは何だというのだ？」

「歡樂の泉」

タンホイザーは言った。

「私はそこに大胆に近付く。そこには躊躇いが水を濁すことなく我が望みも消え去ることはない。無論その泉もまた涸れることはないのだ」

「歡樂の泉だと」

「彼は何を言っているのだ」

誰もがタンホイザーの言葉に顔を顰めさせる。

「不謹慎ではないのか？」

「その様なことを言つて」

「憧れが永遠に燃える為にヴォルフラムよ」

タンホイザーはまたしても周りの声を聞くことなくヴォルフラムに告げる。

「私は愛の本質をその様に見ているのだ」

「戯言は止めるのだ」

ビテロルフがここで立ち上がつてタンホイザーに抗議の声をあげ

た。

「君の歌を聴くことはいい、だがその高慢な言葉は許せない」

「そうだ、その通りだ」

「我等も今の君の言葉は許せない」

ラインマルとヴァルターもこの抗議に加わる。

「君が言うのは悪徳か」

「それとも愛を侮辱するのか」

「我々は高き愛を讃える」

厳かな声で告げるビテロルフであった。

「愛はまた我々に勇気を与え武器を鍛える。愛を恥で穢さんとする輩には剣を取ろう。女性の気高い栄誉と淑徳の為にもまた」

「だが享樂が君の青春を餌食とする時それは戦う程の価値はない」
最後にヴァルターが立ち上がって告げたのであった。

「誰であるうともだ」

「騎士達よ」

タンホイザーは立ち上がった騎士達に対しても向かい合う。そのうえで告げる。

「それが君達の愛というのか」

「その通りだ」

「違うとも言うのか」

「如何にも」

エリザベートはここでタンホイザーの言葉に賛同しようとした。

しかし周りの剣呑な雰囲気には押し寄せそれを思い止まるしかなかったのであった。

「私は享樂の価値ありと思うものがある。だが君達にはそれは見えてはいないのだ」

「見えていないだと」

「そう、見えてはいない」

断言してみせる。

「君達は今まで何を享樂したのか。君達のやり方では愛は豊かなも

のにはならず喜びから出たものは全く何の足しにもならないものなのだ」

「いい加減にするのだ」

ラインマルが厳しい声で抗議する。

「それ以上の言葉が許されはしないぞ」

「そうだ、これ以上は許しはしないぞ」

「愛を貶めることは」

「止めるのだ」

ラインマルにヴァルターとビテロルフが加わりヴォルフラムとハインリヒも剣呑な顔になってしまったところでヘルマンが彼等を制止した。

「歌手達よ、ここは何処なのだ」

「殿堂です」

「それ以外の何でもありません」

彼等は頭を垂れヘルマンにこう述べた。

「ではわかるな。ここは豎琴で争う場」

「はっ」

「剣を抜く必要はない」

「こつも告げる。」

「わかつたな」

「申し訳ありません」

「それでは」

「ではヴォルフラムよ」

「はい」

「また歌ってくれ」

こう言つて歌を薦めるのであつた。歌を薦めると彼はまた歌うのであつた。

第二幕その六

「天よ、我が願いを聞き給え。我が歌を神に捧げ酬となって聞き給え」

「流石だ」

「うむ、見事だ」

また貴人達はヴォルフラムの言葉に満足した顔で頷くのだった。

「やはり彼の歌こそが」

「最も素晴らしいか」

「この高貴にして純潔なる惑いより罪は追放されよ。汝に我が愛は感激もて響け。愛はうるわしき天使の姿で魂に入っていく」

歌をさらに続ける。

「汝は神の僕として近付き私は静かに従おう。汝は汝の星の場所で輝く国へ私を導く」

「だからそれは違うというのだ」

タンホイザーはまたしてもヴォルフラムの歌を否定するのであった。エリザベート以外の誰もがそれを見て再び顔を顰めさせる。

「愛の女神よ」

豎琴を手に歌いだす。

「汝の為に我が歌よ響け！汝を讃える歌を歌おう！」

「何っ！？」

「何だと！」

誰もが今のタンホイザーの歌に驚く。

「愛の女神だと」

「この男、まさか」

「汝の甘き魅惑こそ全ての美の源、全ての優しき奇蹟は汝より生ずるのだ」

「まだ歌うか」

「やはり」

「灼熱もて汝を腕に抱く者のみ愛の何かるかを知る。貴女の愛を知らぬ者こそ哀れだ」

そして遂に叫ぶように歌った。

「行くのだ、ヴェーヌスベルクに！」

「聞いたな！」

「聞いたぞ！」

「今聞いた！」

皆一斉に叫ぶのだった。

「ヴェーヌスベルクに行っていたのか！」

「あの悪徳の場所に！」

「貴婦人方は逃げられよ！」

貴族のうちの一人が叫んだ。

「あの男を避けるのだ！」

「あの背徳の男から！」

「許すな！ここから出すな！」

貴婦人達が殿堂から逃げ去る。エリザベートはただ一人青い顔で留まっていたがそれは彼女だけだった。貴人達も歌手達も剣を抜く。そうしてタンホイザーに詰め寄ろうとする。

タンホイザーは悪びれることもなく彼等に向かい合う。しかしここでエリザベートが立ち上がり叫ぶのであった。

「お待ち下さい！」

「！？姫！」

「まだこちらに」

「この方に剣を向けるのは止めて下さい」

こう言いつつタンホイザーと騎士達の間に入る。無数の剣の前に身体を向けてさえいる。

「どうか。ここは」

「しかしこの男は」

「あの悪徳の場所に」

「それがどうしたというのですか」

強い顔でタンホイザーの前に立ち騎士達を見据えつつ語る。ヘルマンはそれを静かに見ている。ヴォルフラムは離れた場所にいて他の歌手達は険しい顔をして彼の周りに集っていた。

「確かに彼は罪を犯しました」

「そう、許されない罪を」

「彼は犯しました」

「だからです」

まだエリザベートに詰め寄ろうとする。

「退かれよ」

「この男を今すぐ我等の剣で」

「ですがその前に果たすべきことがあります」

「果たすべきこと?」

「そうです」

強張った顔で彼らに告げる。

「魔力に囚われようとこの世の贖罪や懺悔によっても救いをもたらされることはないのですか?」

「それは」

「神は」

「神はあらゆる罪を赦して下さる筈です」

エリザベートが言うのは神の慈悲であった。

「ですから。彼に救いを」

「救いをですか」

「そうです」

タンホイザーの前に立ち続けている。

「私は彼の為に願います。彼に救いを」

「救いを」

「そうです、信仰の勇気が彼に与えられなければなりません。主もまたその為に受難することになったあの信仰の勇気をです」

「エリザベート……」

エリザベートの心はタンホイザーにも伝わった。傲然とした態度

が消えていた。

第二幕その七

「私の為に。貴女は」

「天使だ」

剣を抜く者のうちの一人が呟いた。

「天使が舞い降りたのだ」

「優しい天使が」

「そうだ」

やがて誰もが剣を下ろした。そしてエリザベートの言葉を心の中で思うのであった。

「天使が言っているのだ、救いを与えよと」

「この背徳の罪を犯した者に救いをか」

「そうだ、救いを」

「救いを与えよと」

「タンホイザーよ」

彼等は今度はタンホイザーに告げた。

「姫を見るのだ」

「姫は貴殿の為に命を投げ出した」

「わかつている」

沈痛な顔で彼等の言葉に頷くタンホイザーだった。

「罪を犯した私の為に。彼女は」

「天使の訴えを聞く者誰が心を和らげざらん」

「罪ある者も我等は赦そう」

「それが天の言葉ならば」

天使の言葉こそがそれだというのだ。

「我々は赦そう」

「天の言葉に従い」

「私にもそれは響いている」

タンホイザーもまた言うのだった。

「神の使者が私の前に舞い降りてきたのだ。地上より遙か高きにある神よ。救いの為に天使を送って下さった神よ」

このことを呟く。

「私に救いを。永遠の救いを」

「罪ある者よ、今」

「償いを」

「そうして救いを」

「その手にするのだ」

「神の救いを」

口々に叫ばれていく。やがてヴォルフラムをはじめとした騎士達がタンホイザーの周りを囲んだ。エリザベートは相変わらず彼の前にいる。そして今。ヘルマンが動くのだった。

「領主様」

「恐ろしい罪が犯されていた」

彼はまずこう述べる。

「罪と呪いを背負った者がこの貴き殿堂に入っていた」

ここまで話してからタンホイザーを見るのだった。

「我々は卿を追放とする」

「はい」

「妥当と言つべきか」

「辺境伯が下された処罰だ」

周りの者達はこのことを言った。

「それではやはり」

「正しいか」

「そう思われるぞ」

「永遠の破滅から救う道は開かれている」

「道が」

「そうだ。その道を行くのだ」

タンホイザーに対して告げるのだった。

「このチューリングンから懺悔の道が開かれている」

「巡礼の道だな」

「そうか、あれか」

「ローマへの」

これは彼等にもわかるのだった。

「老いたる者達は既に先に行ったが若い者達はまだ谷で休んでいる」
「ではそこに合流して」

「そうだ。そうして行くのだ」

ローマに行けと。タンホイザーに告げていた。

「ただ罪を少なくする為に心を安らげるのではない」

「懺悔の為に」

「そう、懺悔の為に行くのだ」

厳格だが確かな声でタンホイザーに告げていく。

「彼等のローマへの赦免の祭りへと」

「さあ行くのだ」

「卿の罪を償う為に」

「恩赦の街へ」

人々もこう言って彼をローマに向かわせようとする。

「神の裁決を伝える方の前に行き」

「そして罪を告白するのだ」

「若しも」

ここで貴人達の中の一人が言った。

「恩寵が下らないその時は帰ることはない」

「この度は天使の制止があり怒りを避けられたが」

先程の怒りのことだ。

「汝がまだ罪と恥を持っていれば」

「今度こそ剣が卿を貫く」

「タンホイザー」

エリザベートもまたタンホイザーに対して声をかける。彼を心より心配するその声で。

「愛と恵みの神が貴方を導いて下さるように」

「そうして恩恵を」

「はい、その深く赦され難い罪も消え去ることになりますように」

「我が救いは消え失せ天の恵みもまた去った」

しかしであった。

「だが私は悔悟の心で巡礼しよう」

「貴方が夜の闇の中に消え去らないように私は祈ります」

「我が苦しみの天使よ」

タンホイザーが今見るのは天使であった。己に苦しみを与える天使を。

「私は御前を厚かましくも嘲笑ったが今御前を私を救ってくれた」

「貴方にこの命から祈ります」

エリザベートはただひたすらタンホイザーの為に祈っていた。

「我が祈りと命をお受け下さい。天の神よ」

「魂の救済は消え去った。だが私はそれでもこの恐ろしい罪を懺悔し慈悲を」

この時外から聴こえてきた。清らかな声が。

「あれは」

「あの声だ」

ヘルマンが一同に告げる。タンホイザーに対しても。

「恩寵の祭りの為に慎みて我が罪をあがなわん」

「信仰に忠誠を守る者は祝福されてあれ」

「彼は懺悔と悔悟により救われん」

「ローマへ」

タンホイザーは言った。

「ローマへ。償いの都へ」

今それを誓うのだった。タンホイザーはローマへ向かうことになった。今己が犯した罪を償う為に。白く清らかな天使に導かれて。

第三幕その一

第三幕 恩寵は与えられ

タンホイザーがローマへ向かつて長い時が経っていた。その間エリザベートは来る日も来る日も祈り続けていた。それはこの時も同じであった。

「姫はまた祈っておられるのか」
「そうだ」

騎士達はその緑の谷に集っていた。谷は広く左右に開けている。緑の草が広がり花々も見える。白や桃の小さな花々が咲き谷には青い花や白い岩が見える。落ち着き清らかな場所であった。

「ここで今日も。彼の為に」
「そうか、今日もだな」
「そうだ、今日もだ」

ヴォルフラムがビテロルフに対して答える。騎士達はヴォルフラムを中心として集い一人跪き祈りを捧げているエリザベートを遠くに見ていた。エリザベートは一人祈り続けている。

「今日も祈っておられるのだ」
「そして彼は今は」
「もうすぐらしい」

ヴォルフラムは今度はラインマルの問いに答えた。
「今巡礼達が戻って来ている」

「そうか、やつとか」
「そう、やつとだ」
ヴァルターの言葉にも答える。

「やつとな。戻って来たのだ」
「では彼もまた」
「姫の祈りも」

ハインリヒもまたエリザベートを見ていた。

「通じるのだろうか」

「わからない。だが遂に戻って来たのだ」
ヴォルフラムがわかっているのはこのことだった。

「この時が来た。それは間違いないのだ」

「聖者達よ」

「神よ」

彼等は天の存在に対して声を送った。ここではエリザベートと同じであった。その見るものは。

「どうか彼女の声を聞いて欲しい」

「恩寵を」

「故郷よ、我等は喜びて汝を見る。美しき草原に」

「この声は」

巡礼達の声だった。この声を聞いてエリザベートは顔をあげたのだった。

「巡礼の」

そして立ち上がり言う。

「あの方々が戻って来られた」

「信心深い歌だ」

「うむ」

騎士達もこの言葉に頷くのだった。彼等もまた巡礼の歌を聞いていた。そのうえで語る。

「恩寵が救済を告げる歌」

「その歌が今」

「神に逆らわず巡礼を終えた今」

巡礼達の歌がさらに続く。

「懺悔と悔恨により主の許しを得たり」

「どうか神よ」

エリザベートは切ない声で呟く。

「あの方を。どうか」

「天よ」

「どうか御聞き下さい」

騎士達も祈るのだった。

「彼女の祈りを」

「どうか。その御心に」

「我が歌は主の為に響く」

巡礼達の歌がさらに続けられていく。

「恩寵の救済は我々に与えられ彼は何時か天国に平和に行く」

「地獄と死とは彼の恐れにあらず」

「故に我が命の限り神を讃えん」

「あの方は」

エリザベートは巡礼達を見ていた。しかしそこには彼はいなかった。彼はいない。エリザベートはそれを見てまた跪いた。そうして深い祈りを捧げるのであった。

「マリア様。どうか我が祈りを」

「また祈っている」

「彼の為に」

騎士達は遠くから彼女を見守っている。巡礼達は遠くへ消えていった。

「私は貴女に訴えます。私の命を捧げ」

「命を」

「そこまで」

「御身の至高の世界に天使の如く。今心より祈ります」

祈りつつ言うのだった。

「若し愚かしい妄想に囚われ私の心が神から外れるのなら。若し罪ある欲望や醜い欲が私の心を満たすなら私は千の苦痛に身を沈めこの欲望を心の中で殺しましょう」

「姫………」

「ですが全ての過ちを償うことができないのならば」
祈りはさらに彼女の口から出される。

第三幕その二

「どうぞ私を慈悲深くお召し下さい。私が貴女の下僕として検挙に近付けますように。貴女の恵みに満ちた恩愛により彼の罪の為祈ることが出来ますように」

最後にこう告げて深い祈りに入る。それが終わってから立ち上がった時にゆっくりと騎士達が彼女に歩み寄るのだった。

「姫」

「貴方達もここに」

「はい」

厳かな声で彼女に答える。

「我々もまた」

「共に」

「祈って頂けるのですか？」

「宜しければ」

その厳かな声でまた述べるのだった。

「どうかここで」

「我々も」

「私は」

だがエリザベートはここで穏やかに顔を下に向けた。そうして静かに首を横に振るのだった。静かだがそれでも確かな動きであった。

「後はマリア様の御前で」

「左様ですか」

「申し訳ありません」

こう述べてまた頭を垂れるのであった。

「私はこれで」

「わかりました」

「それでは」

騎士達は彼女の言葉を受けて静かに身を止まらせた。エリザベ―

トは静かに去りその白い姿を谷から消した。谷の中を夕闇が包み込み空には星が見えようとしている。騎士達はその中の一つの星を見ていた。

「死の予感がする」

ヴォルフラムが歌いはじめた。

「それが夕闇となり大地を多い黒き衣で谷を被せる」

「この谷を」

「かの嘲弄を貪る魂は夜闇と恐怖を恐れている。その時御前は現われる」

今ヴォルフラムはその星を見ていた。夕星を。

「御前の柔らかな光は遠くより送られその輝きは夜の薄闇を照らし森からの道を優しく示す。ああ、我が優しの夕星よ」

夕星は静かに優しい光をヴォルフラム、そして騎士達に見せて輝きを与えている。ヴォルフラムはその輝きを見つつさらに歌っている。

「私は御前にいつも快く挨拶を送った。あの方が御前の下を通る時彼を裏切らぬ心で挨拶を送ってくれ。あの方が天使となるべく。あの方が地上の谷より姿を消すまで」

「夕星よ」

騎士達もヴォルフラムに続いて言う。

「どうかその日まで」

「あの方を導いてくれ」

五人で祈るのであった。この祈りが終わったその時に。遠くからぼろを纏い杖を頼りに歩く男が見えてきた。遠目でよくはわからないがあちこちが破れてしまったマントを羽織っているのがわかる。

「あれは一体」

「巡礼の者か」

「おそらくはな」

それに遅れて来た者かと思ひ声をかけるのであった。

「誰か」

「寂しく還る貴方は誰か」

「私が誰かか」

その巡礼者から声を返って来た。

「私は君達をよく知っているが」

「その声は」

「まさか」

「そう、私は」

声の主は静かに答えてきた。

「タンホイザー。戻って来たのか」

「ここに」

「罪は償ったのか？」

「それは」

彼は騎士達の問いに項垂れるだけであった。

「どうしてここに」

「安心してくれ」

ヴォルフラムに対して答えてきた。

「私は君達を捜しているのではないのだ」

「違うというのか」

「そう、私が捜しているのは」

顔を見上げて言うのだった。

第三幕その三

「あの道だ。かつて私が容易く見つけることができたあの道を」

「あの道!？」

「それは一体」

「女神の泉」

こう騎士達に答えてきた。

「そこへの道を」

「馬鹿を言え」

ヴォルフラムが彼の言葉を遮った。

「君の行く道はそこではない筈だ」

「そうだ」

ハインリヒも言う。

「君はローマに行くべきだ。また」

「いや、行ったのだろう?」

ヴァルターはこのことを彼に問うた。

「ローマに。確かに」

「ローマのことは言わないでくれ」

しかし彼はこう言葉を返すだけであった。

「もう。私には」

「聖祭には出たのだろう?」

ラインマルが問うのは祭のことであった。

「ならば」

「それも聞かないでくれ」

これもまた遮るタンホイザーであった。

「私には」

「では君はどうしてここに」

ヴォルフラムはタンホイザーの側に来て彼に直接問うた。

「来たというのだ。よかつたら話してくれ」

「そうだ、是非共」

「我々に話してくれ」

「何故そんなことを言う」

タンホイザーはここで騎士達に対して問うた。

「君達は私の敵ではなかったのだ」

「敵！？違う」

「そうだ」

すぐに騎士達はそれを否定した。

「何故我々が君の敵なのだ」

「我々は君の友人だぞ」

「友人か」

その言葉がタンホイザーの心に響いた。

「私を友人だと言ってくれるのだな」

「何度でも言う」

「だから。君をここで」

「そうか。私を仲間と」

騎士達の言葉を聞き今タンホイザーの心が動くのだった。

「言ってくれるのだな」

「常に競い合ってきたではないか」

「それでどうしてそんなことを」

「わかった」

タンホイザーは彼等の言葉を聞いているうちに意を決した顔になった。そうしてそのうえで話をはじめた。彼のこれまでの話を。ローマでの話を。

「私は今までどの様な懺悔者も感じなかった程の心を以ってローマへ向かった。一人の天使を傲慢なる者から不遜の罪を取り払ってくれたのだから」

「それはわかつている」

「だからこそ君は」

「そして」

タンホイザーはさらに歌う。

「その天使の為に謙虚に懺悔し拒まれた救済を請い彼女の涙に応えようと決意していた」

「だからこそローマに行つたのだらう？」

「違うのか？君は」

「私の傍に重圧に耐えかねた巡礼者が道を辿るのを見ても私の心に比べれば容易であつた」

「容易だつたのだな」

「そう、容易だつた」

また騎士達に述べる。

「彼等の足が牧場の柔らかい土を踏む時私は裸の足で茨や石を求め彼等が泉で石を潤す時私は太陽の灼熱を浴びた」

「苦難を自らも止めたか」

「これだけではなかつた」

歌が続けられる。

「彼等が敬虔に天に祈る時神を讃え血を流し宿屋で疲れを癒す時雪と氷の中にいた。イタリアの優しき山野からも自然の美からも目を閉じた。苦痛を自ら受けたのだ」

「充分ではないのか？」

「それでローマに行けば」

「ローマの聖なる場所に至り聖域のしきいに座して祈つた。朝が来て鐘が鳴り天の歌を響かせた」

「天のか」

「やがて激しい歓喜の声が上がり」

巡礼者達の声である。

第三幕その四

「多くの者がその恩恵と救済を得た」

「では君はどうだったのだ？」

「そう、君は」

「私もあの方を仰いだ。幾千もの人に恩寵を与えられ罪を除かれたあの方の御前に。そして頭を地につけ我が罪、悪しき快樂の罪と懺悔のいやささりし渴望についても申し上げた」

「そしてどうなったのだ？」

「君は」

「これだ」

彼等に杖を指し示して騎士達に告げた。

「これがその返答だった」

「杖が！？」

「それは一体」

「あの方は仰った。ヴェーヌスベルグに留まった罪はこの杖が新緑に飾られることがないのと同じように地獄の熱き刻印から救われることはない」

「駄目だったのか」

「そう、許されなかった」

項垂れて歌う。

「私には最早救いはなく恩寵の歌も忌々しく響く。だから」

「だから。何だ？」

「何だというのだ」

「私は求める」

彼は叫ぶ。

「あの泉への道を。愛の女神の場所を」

「馬鹿を言え、はやまるな」

「そうだ、思い止まれ」

騎士達は彼の左右を取り囲んで必死に制止する。

「君にはまだ希望がある」

「それを忘れるな」

「希望だと」

絶望に覆われた顔で彼等の顔を見返すのだった。

「私に希望があるというのか。この杖に」

「それは」

こう問われると言葉を失うしかなかった。

「だが。しかしだ」

「君はここで求めれば」

「愛欲の女神よ」

タンホイザーはまた呼びだした。

「どうか私を貴女の場所へ。ヴェーヌスベルグに」

「な、何だ！？」

「何だこの光は」

ビテロルフとヴァルターが周りを見て驚きの声をあげる。

「薄く明るい光が」

「しかもこの霧は」

薔薇色の霧であった。香りまである。タンホイザーはこの光と霧を見ていよいよ顔をあげた。

「この光と霧なのだ、これだ」

「！？まさか」

「この光と霧こそが」

ラインマルとハインリヒはその二つの中で顔を蒼白にさせていた。

「呪わしきあの場所への」

「誘いだというのか」

「この優しい香りこそが。私が今行くべき場所」

タンホイザーは虚ろな声で語る。

「さあ、君達にも見える筈だ」

「み、見ろ！」

ヴォルフラムがここで辺りを見回して仲間達に叫ぶ。

「あの女達は」

「まさかあれは」

「恐ろしい。この世に真にあったのか」

「あれこそニンフ達」

タンホイザーは虚ろな声で騎士達に語る。

「水の乙女達に海の乙女達が」

「異教の精霊が」

「ここに出て来たのか」

「春の国ヴェーヌスベルク。永遠の愛欲の泉」

「来ると思っていたわ」

ここであの神が姿を現わしてきた。妖艶な姿を見せて。今タンホイザーの前に浮かび上がってきたのだ。

「不貞の人。あの神に許されなかったのね」

「如何にも」

暗い顔でヴェーヌスに語る。

第三幕その五

「私はもう。この世にはいられなくなった」

「言った筈。あの神は貴方を救いはしないと」

「そうだった。愛欲の女神を」

ヴェーヌスを見て言う。

「愛欲の女神よ。貴女の世界に再び」

「いかん、このままでは」

「タンホイザー」

騎士達は必死に彼を呼び止める。

「駄目だ、ここに留まるのだ」

「何としても」

「永遠に喜びの泉に満たされるように」

騎士達が呼び止めるその間にもヴェーヌスはタンホイザーを誘う。

「さあ今度こそ永遠に」

「我が救済は貴女の下にこそ」

「そう。だから」

「だから駄目だと言っている」

「思い出すのだ、苦難を」

騎士達はもうタンホイザーとヴェーヌスの間に立っていた。その
うで彼を止めていた。

「敬虔を思い出すのだ」

「行つてはならない」

「快樂だ」

それでもタンホイザーの虚ろな言葉が出される。

「私にはそれこそが」

「さあ、ここへ」

またヴェーヌスが誘う。

「ここに来るのです。さあ」

「いけない、行つてはならない」

ヴォルフラムはとりわけ強くタンホイザーを止める。

「君は。何があつても」

「私を捨ててくれ！」

「駄目だ！」

「誰が捨てるものか！」

騎士達は自分達を振り捨てようとするタンホイザーをなおも止める。

「君の様な罪を犯した者も」

「恩恵は与えられるべきなのだ」

「救いが」

「救いなぞもう」

タンホイザーは騎士達の言葉を拒み続ける。そのうえで差し出されたヴェーヌスの手に向かおうとする。しかしここでヴォルフラムが言った。

「天使が君の為に地上にいるのだ」

「天使!？」

「そう、天使だ」

彼はタンホイザーに言う。

「天使が祝福を君に与えるのだ」

「そうだ、天使が」

「タンホイザー、君を」

他の騎士達もタンホイザーに告げる。するとタンホイザーは自然にこの名を口にするのであった。

「エリザベート」

「そう、姫だ」

「姫が君の為に祈っているのだ」

「全てを捧げて」

「私の為に」

それを聞いたタンホイザーの動きは完全に止まった。最早一歩も

動かない。

「姫が。エリザベートが」

薔薇色の霧が次第に晴れていく。そのかわりに明るい光が見えて来る。それは無数の松明の光であった。タンホイザーも騎士達もその光が何なのかすぐにわかった。

「敬虔なる受難の娘より魂の救済が与えられた」

「タンホイザー」

ヴォルフラムがその光から放たれる無数の声を後ろにまたタンホイザーの名を呼んだ。

「天使は君の為に神の玉座に訴え出た」

「そして」

「タンホイザーよ」

「それは聞き届けられた」

「君は救われたのだ」

ビテロルフもヴァルターもラインマルもハインリヒもヴォルフラムに続く。今彼はここに救われたのだった。一人の天使によって。

「エリザベート、貴女は」

「もう一人の私が私を消した」

ヴェーヌスの姿が消えていく。その中で彼女の声だけが聞こえる。

「これでもう」

「天使は彼女の聖なる報い」

また声が聴こえてくる。先頭にはヘルマンがおり棺が運ばれている。そこに彼女がいた。

「天なる喜びの勝利」

「聴こえるな」

「あの声が」

騎士達がここでもまたタンホイザーに問う。

「聖なる声が」

「君の耳にも」

「聴こえる」

タンホイザーは今はずきりと言った。

「声が。天使を祝福する声が」

「清き人は聖なるかな。聖なる群れに加わりて永遠なる神の前に立てり」

「彼女は罪人の為に泣き天の救済を請い願ひ」

「その罪人は救われる」

「聖なるエリザベートよ」

タンホイザーは静かに言った。

「我が為に祈ってくれ」

最後まで言うとき膝をつき前から倒れた。そのまま動かなくなった。その彼を多くの者達が囲んでいく。そこにはヘルマンと騎士達もいた。

一人の巡礼がそこにいた。彼はその手に杖を持っていた。タンホイザーが先程まで持っていたあの杖だ。見れば今それに新緑の葉が生え茂っていた。

「救済は世に下された。それは夜の聖なる時に起こり主は奇蹟により自らを示し給うた」

「騎士が持っていた枯れた杖は主が新緑で飾られた」

タンホイザーを囲む全ての者達が主と彼の救済を讃えていく。

「地獄の烙印を持つ罪人はこうして救済を新たに受ける」

「この奇蹟を通して恩恵を見出せし者の名を呼び伝えよ」
そして言われる。

「神は全ての世の上にあるその憐れみは嘲りではない」

「恩寵の救済は懺悔者に与えられた。今より彼は天の平和に入る！」
ヘルマンと騎士達が跪き祈る。タンホイザーはその中央で祝福を受けている。救済を与えられた彼は今エリザベートのいる天へと向かっていたのだった。祝福を受けた世界に。

タンホイザー

完

2
0
0
8
.
9
.
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0109j/>

タンホイザー

2011年4月28日00時57分発行